

## 「恐れることはない」

詩編 第16編 7節～11節  
マタイによる福音書 第28章 1節～10節

説教 岡村 恒牧師

「恐れることはない」(5節)。主イエスが墓を空にされた朝、墓から走り出した女性たちに向かって語りかけられた言葉です。この朝、この言葉が、全世界に向かって宣言されました。

主イエスが十字架の上で死んで、その遺体が墓に葬られるのをマリヤたちは見届けました。そして日曜日の朝早く、主のご遺体を丁寧に埋葬するために墓に向かいました。

しかし主イエス・キリストは、その墓を空にして復活されました。女性たちが墓に向かう途中、地震が起こり、墓をふさいでいた石が取り除かれ、主の天使がその上に座っていました。番兵たちは死人のようになりました。生きていっている者でも、神と無関係で永遠の命を持たない者は、死んだようになって立ち上がるができないのです。

「あの方は、ここにはおられない」(6節)。天使はそう告げました。死人は墓を空にしません。死人を捜していた女性たちは、この墓の中に主イエスを発見できません。主イエスは確かに、死んで葬られましたが、この朝、主イエスの墓は空になりました。この事実を目の当たりにして、女性たちは恐れを抱きました。これは、私たち誰もが心の奥底に抱く恐れです。

主イエスの復活を信じることができないまま、ただ主の墓が空になったことに驚き、恐れを抱いたままで女性たちは走り始めました。

私たちは自分の知識や経験、自分が理解できる範囲でこの世界を受けとめます。マリヤたちはこの朝、私たちと同じ常識を持って墓をのぞき込みました。そこには死んだ者が横たえられているはずでした。ですから、空の墓を目にし、天の使いの言葉を聞いた時、それまでの世界観が根底からひっくり返される恐れを抱きました。

マリヤたちが抱いた恐れは、これまで信じて来たものが全部崩れ去ってしまう恐れです。この時、主イエスの口から出た最初の言葉を、口語訳聖書では「安かれ」と訳していましたが、新共同訳聖書では「おはよう」(9節)と訳してい

ます。ごく普通の、日常生活で使われる朝の挨拶の言葉です。主イエスの口から出たごく普通の挨拶の言葉は、この朝、新しい世界を切り開く挨拶に変わったのです。

死人が墓の中で朽ち果てていく世界に女性たちは生きてきました。しかしこの朝、死が打ち破られ、新しい命が与えられる世界になりました。これまで私たちの人生を支えて来た考え方、常識がすっかり過去のものとなり、世界全体が新しくされてしまう時、私たちは大きな恐れに直面します。その私たちに、主イエスは「おはよう」と語りかけて下さるのです。

主イエスを信じる者に命が与えられ、神の祝福が注がれます。だから、恐れることはないのです。今この瞬間、世の終わりが来るとしても、恐れることはないのです。御子を信じる者は「裁かれることなく、死から命へと移っている」(ヨハネによる福音書 5章24節)のです。主イエスは、「恐れることはない」という言葉を告げるために、この朝、女性たちの前に立たれました。

この女性たちには、新しい使命が与えられました。弟子たちのところに言って、ガリラヤに行くように告げる、というものです。主イエスの死と復活を宣べ伝え、主イエスと出会う場所を指し示す使命です。ガリラヤは弟子たちの故郷、日常そのものでした。しかしそこは、復活された主イエスと出会い、主と共に歩き出す新しいガリラヤになりました。私たちも、主イエスの復活を宣べ伝え、主と出会う礼拝を指さし、主イエスを信じて生きる新しい日常へと、神と共に歩き始めることができるのです。

あの朝、墓を空にして下さった主イエス・キリストは、私たち一人一人の日常に突入して来て「おはよう」と語りかけ、新しい人生を歩ませて下さいます。主の死と復活とを告げ知らせる使命を与え、終わりの日を待ち望んで歩む者にして下さいます。終わりの日、主と共に囲む食卓を楽しみに歩みましょう。

(記 岡村 恒)